恐さを遊び化する子どもたち

永田　陽子

最近、阪神大震災や大島の噴火などの天災、あるいはニューヨークの国際貿易センタービルの崩壊など歴史に残る大事件が起こり、子どもたちもテレビなどからその無残な映像を目にすることが多い。中には身近なこととして受け止め不安を抱いている子どももいる。つい半年前まで国際貿易センタービルの前の公園で遊んでいた四歳児のA子は、テレビで何度も流されたビルがくずれる映像をくいいるように見て、夜泣きをしたそうである。また、ニューヨークに行ったことのないB子は自分のマンションが崩れるのではないかと不安に思い、「おうち崩れない？」と何度も母親に聞いたという。このように、三、四歳でも世の中で起こっているさまざまな出来事を、実際に経験していなくても映像などと結

びつけて不安に思うことも多い。

さて、幼稚園や保育園では非常事態に備えて避難訓練をすることが義務づけられている。しかし、避難訓練そのものが子どもの不安をかきたてることもめずらしくない。といってもふざけ半分の遊び仕立てな活動の一部にしてしまえば訓練の意味がなくなってしまう。その兼ね合いはとても難しく訓練をするたびに悩むところである。ここでは園で初めて経験した避難訓練で不安を感じたR君（三歳児）が、遊びの中で自ら始めた避難訓練ごっこをしながら、その不安を乗り越えていく姿をあげてみよう。

G君の意外な反応

初めての避難訓練

三歳児が入園して二カ月がたち、そろそろ自分の先生やクラスがわかり始めた五月末、この子どもたちにとっては初めての避難訓練をおこなった。不安を少なくするために、園庭で遊んでいた子どもたちも部屋に入り、先生のまわりに集まった時に始まるように設定した。キンコンカン「これから地震が起きたときの練習をします。恐くありませんよ。みんな先生のお話をよく聞いてくださいね」と園長先生の声でそれぞれのクラスに放送が入る。キンコンカンとなった途端にどこから聞こえてくるのかときょろきょろする子ども、不安を感じて先生にかじりつく子ども、平然と遊びを続ける子どもなどさまざまである。G君は急に顔がこわばり泣き声をあげながら、狂ったように庭へ飛び出しくるくるとまわりはじめた。担任の私はい

つも元気にはつらつとしているG君の意外な反応に驚き、G君を抱きしめ「大丈夫、大丈夫」と落ち着かせた。その日はまだ防災ズキンは被らずに園庭の大きなけやきの下に集まり訓練を終えた。その次の日からG君は登園してきた時や遊んでいる時にも思い出したように「今日は避難訓練ないよね」と何度も確認してきた。その都度、私は「ないわよ。でもG君が大変な時は先生がいつでも守ってあげるよ」と返した。

思いがけない事態に極度に緊張してしまうのか？　状況のわからなさに不安を感じるのか？　放送がこわいのか？　など…いろいろと考えた。お母さまにも伺うと、多少状況がつかめない時に顔をこわばらせることはあるが、走りまわったりすることはなかった。もちろん、地震にあったことも、そうしたことを家族で話し合うこともなかったということであった。G君の園生活をみているかぎりでは新しい状況にも、三歳児らしい不安をのぞかせることはあっても、特別に他の子どもと変わったところは見られないし、思い当たることはなかった。原因はともかくとして、まずは一緒にいることでG君の不安を受け止めようと思った。

恐さを表わし、遊び化する

九月のある日、G君はメロディを口づさみながらぶつぶつ言って登園してきた。何を言っているのか聞いていると「放送します。放送します」と誰にというのではなく言っていたが、しばらくするとまたいつものように遊び始めた。あとで、お母さまから、夏休みにいなかで夕方に町会の放送の音楽がなると急におびえたと伺った。そこで、G君は避難訓練の放送が始まるキンコンカンという音にも不安を感じていたのかとあらためて思った。G君は不安になったことをあえて自分が園生活の中で口に出して

見ることで、不安を解消していったのだろう。次の訓練の時は事前にG君に「今日は避難訓練があるけれど大丈夫だから先生の近くにいてね」と伝えた。その日は放送が入ると表情を硬くしたが、以前のように走り回ることはなかった。

「幼稚園が火事ですよ。みんな避難しましょう」

十月のある日、部屋の中で二、三人の友だちとおうちごっこをしていたG君はごちそうを作ってテーブルに並べていた。ところが急に色画用紙をとりに行くとくるくるとそれを巻いて口にあて「地震です。みんな避難してください」とまわりで遊んでいる子どもたちに言って歩いた。そして、G君は庭にでるとすぐ目の前の梅の木のところのござを敷いてあるところへ行き、「ここに、避難してください」と言っている。そこは怪獣ごっこの基地であったが、そこで遊んでいた同じクラスのR夫、K夫、Y夫は自然とG君の提案を受け入れ、頭に手を当てながら座り始めた。部屋にいた私も一緒に外に出てござに座った。すると、すべり台をしていたM子も手を口にあて、「地震ですよ。あそこに避難してください」と部屋の友だちに呼びかけにいった。製作コーナーで車を作っていたY夫、A夫たちも出てきた。ござの上は満員になった。部屋をのぞきに行くと部屋の中には誰もいなかった。そして誰が消したのか電気も消えていた。しばらくすると、子どもたちは何もなかったようにまた元の遊びを始めた。ござはまた怪獣ごっこの基地になった。

ある日、突然起こった出来事だった。あれだけ避

難訓練をこわがっていたG君が考え出した遊びで、この遊びを通して自分の中のおそれの気持ちを乗り越えようとしているように感じた。自分がことをおこす元になっていることも、とても意味があることだと思った。また、このG君の投げかけにクラスの殆どの子どもが加わったことにも驚いた。きっと、初めての避難訓練の時のG君のおびえた様子をまわりの子どもたちが受け止めていたのかもしれない。友だちとのかかわりも深まっているのだろう。そして、その時に自分の中にも共通する恐さを感じながら、我慢していたのかもしれない。だからこそ「地震だ」という呼びかけに、手を頭に当て部屋の電気を消してくる子どもたち。みんなきちんと上靴を外靴に履き替えて出てきたところは、これは遊びよ、うそっこよ、というわくわくとしたイメージが共有されている感じもあったのだろう。それ以後、何度か避難訓練ごっこが行われた。時にはH夫が「地震が起こりました」とみんなに声をかけると、G君がそれに加わり、机の下を指差し「ここに避難してください」と言うこともあった。G君は「今日、避難訓練ある?」と聞いてくることもなくなった。この遊びも二学期の後半にはあまり取り組まれなくなった。

G夫は訓練に落ち着いて参加できるようになった。園生活の中で友だちを巻き込み遊び化して自分の弱さを乗り越えていく子どもの力はすごい。子どもが園生活の中で繰り広げる遊びは、その子なりに意味があることだと改めて気づいた出来事だった。これも自由な遊べる時間があるからこそできることである。その時間や場所をこれからも十分に保証してあげたいと思う。

（日本女子大学附属豊明幼稚園）